184 白血病性腫瘤におけるGa−67−シンチグラフィーの評価

増田英明、佐島敬清、長山鎮二郎（横浜市立市民・がん検）赤塚祝子、三本重治、安田三弥（同・内科）尾原石太郎（同・放科）

白血病において経過中に髄外に浸潤・転移し腫瘤を形成することは稀ではなく、Hymanによれば3.1%に認められたとされ、白血病の治療効果判定において腫瘤形成の有無及びその動向が大きな問題となっている。今回、病理学的及び臨床的に診断を得た成人例の髄外性白血病性腫瘤10例を対象にしてGa−67シンチグラフィーを行ないその有用性について検討した。対象症例は急性骨髄性白血病（AML）7例、急性リンパ性白血病（ALL）2例、慢性リンパ性白血病（CLL）1例であり、腫瘤発生部位は胸部及び縦隔8、頸部2である。

その結果は①Ga−67の異常集積は強弱の程度の差はあるが全例に認められた。②組織型では特にALLによる腫瘤は強い集積を示す傾向にあった。③部位別では頸部に発生した腫瘤は弱い集積を示す傾向にあった。④腫瘤の大きさと集積の強弱の程度には相関を認めないと思われた。

185 薬剤性肺臓炎の早期検出に対する^{67}Gaシンチグラフィの有用性について

向田邦俊，佐々木正博，中西敏夫（広大　放部）小山　矩，勝田静知（同，放）

抗癌剤使用中に起きる薬剤性肺臓炎は、時として致命的であり、従来の胸部X線写真，血液ガスおよび肺機能検査では間に合わない症例もみられる。そこでわれわれは、薬剤性肺臓炎の早期検出を目的として、昭和56年10月から昭和58年3月までの間に、抗癌剤、特にペプロマイシンを使用した原発性肺癌16例を対象に、胸部X線写真，血液ガス，肺機能検査および^{67}Gaシンチグラフィを可能な限り定期的に施行したところ、3例に^{67}Gaシンチグラフィで健常肺野にびまん性の異常集積像がみられ、他の検査に先行して、早期に肺病変の出現を指摘し得た。3例中2例は経気管支末梢肺生検により、他の1例は臨床的に薬剤性肺臓炎と診断した。

抗癌剤使用中に、^{67}Gaシンチグラフィで肺野にびまん性の異常集積像を認めた場合、悪性腫瘍の肺浸潤，免疫能低下による肺感染症および薬剤性肺臓炎などが考えられる。確定診断には、肺生検が必要であるが、まず肺病変の出現を早期に予知する必要があり、その検出法には最も^{67}Gaシンチグラフィが有用と考えられたので、症例を中心に報告する。

---

186 子宮内膜癌診断における^{67}Ga-sintigraphyの有用性と限界について

西　睦正，藤田卓男，福本　悟，赤松信雄，関場　香（岡大●婦），青野　要（岡大●放）

昭和54年より4年間，当科で開腹された子宮内膜癌33例に術前に施行された^{67}Ga-sintigraphyの所見に関し，retrospectiveに検討を加えた。対象はI_a期20例I_b期7例，II期5例，IV期1例である。G_aシンチ陽性率はI_a期40%，I_b期57%，II期80%，IV期100%で全体で52%であった。発育様式をび慢型（D型），限局型（C型），混合型（M型）の3型に分け陽性率をみると，D型50%，C型38%，M型83%で，D型とC型とではっきりとした差はみられなかった。I_a，I_b期症例を組織分化度により3段階に分けて検討したが，明瞭な検出率の差はみられなかった。次に癌病巣の大きさによる検出率の差を検討した。まず，D型を占拠領域が子宮内腔の1/3以下，1/3〜2/3，2/3以上の3群に分けた。1/3以下では0%，2/3以上では100%の検出率であった。次にC型の3方向径積（cm^3）を10以下，10〜30，30以上の3群に分けた。10以下では0%，10〜30は40%，30以上は100%の検出率であった。以上より，^{67}Gaシンチの子宮内膜癌病変検出率に最も重要な因子はその大きさで，D型では子宮内腔の1/3，C型では3方向径積$10cm^3$が検出限界と考えられた。

187 婦人科悪性腫瘍治療後管理における骨シンチグラフィーの有用性

岡本古明、岡村信介、熊沢昌子、前田隆義、佐野隆、植本実、杉本修（大阪医大　婦）坂田恒彦、山崎紘一、赤木弘昭（　同　放）

婦人科悪性腫瘍治療後、臨床症状発現が遅いために発見が遅れる傾向にあった骨転移を早期発見する目的で、全身骨シンチグラフィ（骨シンチ）を行い、各腫瘍の転移頻度を検討し治療後の管理における必要性を追求した。

対象は、治療後の子宮頸癌224例、体癌21例、卵巣癌29例、その他10例であり、骨シンチは^{99m}Tcリン酸化合物10mCiを用い、静注2〜3時間後にガンマカメラ（Nuclear Chicago）で撮影した。所見は、異常集積及び集積低下の有無と程度により判定し、異常が明瞭なものを陽性、不明瞭なものを疑陽性とした。骨転移の確認は、CT及び単純X線撮影を総合的に判断することによった。その結果、子宮頸癌では、骨シンチ陽性疑陽性は61例（27.2%）でそのうち28例（12.5%）に骨転移が確認された。体癌では、骨シンチ陽性疑陽性7例（33.3%）で、3例（14.3%）に骨転移が確認された。卵巣癌では骨シンチ陽性疑陽性7例（24.0%）で5例（17.2%）に骨転移が確認され、そのうち3例はKrukenberg腫瘍であった。骨転移部位は、脊椎に多く（36.7%）ついで骨盤骨（28.6%）、肋骨（12.2%）であった。

以上より、婦人科悪性腫瘍治療後の骨転移頻度は、比較的高く、骨シンチによる定期的な追跡が必要と考えられた。

Presented by Medical*Online